

ジャック・ロンドン作「嘘つきナム・ボック」

大矢 健訳

「あれはバイダルカ（仮注し）じゃないかい？ 見てよ、あれはバイダルカだろう。パドルの使い方がなっていない、あの男を見て！」

老婆バスクワーワンは、膝立ちになる。体の弱さと期待でふるふる震えていた。海のほうを見つめている。

「いつだってナム・ボックは、パドルの扱いが下手でね」と、老婆は懐かしそうにつぶやいていた。手をかけ陽の光から目を守りながら、銀色にきらめく海を眺めている。「忘れるわけではないさ。ナム・ボックは、ほんと不器用な子で……」

が、そこにいた女たち、子どもたちは大声で笑う。笑いには馬鹿にしているような含みがあった。バスクワーワンの声はしだいに小さくなり、しまいには声にならないまま、唇だけが動いているありさまだ。

クーガが骨を削るのをやめ、白髪のままだった頭をもたげる。バスクワーワンが目にしていたものを追ってみた。大きな波が舟を針路から外してしまふことがなければ、バイダルカは浜に向け真っ直ぐに進んでいた。漕いでいる者は、不器用にといいか、力づくで舟を運んでいる。抵抗力が最大になってしまふジグザグ航路を進みながら、岸へと接近して

いる。クーガの頭はふたたび下を向き、膝のあいだに挟んだ象牙色の牙に魚の背びれを彫刻する作業に戻った。海を泳いでいたことなどかつてない魚、その彫刻である。

「あれは隣村とろりむらの男だよ。間違いない」と、やっとクーガが口を開く。「骨への印の付け方のことで相談するのに、やって来たのさ。しかし漕ぐのが下手糞な奴だな。漕ぎ方がまったくなくなっとらん」

「違うよ。あれはナム・ボックだよ」と、バスクワーンはくり返す。「わたしに、自分の息子が分からないとでも言うのかい」と、彼女のかん高い声が響いた。「何度でも言うがね、あれはナム・ボックさ」

「夏になるたびに、あんた、いつもそう言ってきたじゃないか」と女の一人が、バスクワーンを優しく叱る。「海から流水がなくなると、腰を下ろして辺りを眺め回しながら、たまたま舟を見かけると、日がな一日、あんたは言いつづけるのさ。『あれはナム・ボックだ』って。ナム・ボックは死んだんだよ、ねえ、バスクワーン。そして、一度死んだら、人は帰ってはこないんだ。死んだ奴が戻ってくるなんてあり得ないんだよ」

「ナム・ボック！」老婆が大声をあげた。その声があまりに大きくはつきりしたものであったので、村の全員が驚き、彼女を見つめた。

どうにか立ち上がると、老婆は砂浜をよるよると歩いた。ひなたほっこをしていた赤ん坊に、足をひっかけてしまった。母親が赤ん坊をあやししながら、老婆を罵る。しかし、老婆のほうはまったく注意を払わない。子どもたちが老婆より先に浜へ駆け降りていった。バイダルカの男は近づいていたが、漕ぎ方になっていないものだから、沈没しかけていく。クーガはセイウチの牙を落とすと、杖にもたれながら、子どもたちと一緒に走り出した。そのあとに、二人組、三人組の男たちが続いた。

舟が横転し、立った波のために沈みそうになる。一人の素っ裸の少年が海に飛び込み、船首を引っぱって浜に引き上

げてやった。舟の男は立ち上がり、並んだ村人たちを覗き込むように見つめる。汚れてくたびれた虹色のセーターが、彼の広い肩にだらりと掛けられている。水夫がするように、赤の綿のハンカチを首のまわりに結んでいた。短く刈り込まれた頭には漁民用のタモシャンター(タモ)を被り、ダンガリー布製の作業ズボンを履いて、足には作業靴という出で立ちである。

それでもここ、広大なるユーコン・デルタの素朴な漁民たちにとって、彼は人目を引く存在であった。村人たちはベリング海を見渡して生涯を過ごし、今まで二人の白人にしか会ったことがないように人たちだったのである。白人の一人は国勢調査員で、もう一人がイエスズ会の宣教師だった。金かんが出る土地でもなく、高価な毛皮が手に入るわけでもないから村は貧しく、白人たちはただ通りすぎていった。また、数千年にわたり、ユーコン河がアラスカの山々から岩屑を運び、海岸線を埋めていた。船は岸から見えないところでさえ座礁した。それで、奥深くまで届く湿った海岸線と泥炭性の列島は船の避けるところとなり、漁民たちは、海岸線も列島も、その存在などまったく知らないということになった。

骨の彫刻師クーガは、陸にむかって急に走り出し、杖に引っかかって転んでしまった。「ナム・ボックだ！」と、足場を求めてもがきながら彼は叫んでいた。「沖へ流されたナム・ボックが、帰ってきたんだ」

男たちも女たちも、おどおどと身を隠してしまった。子どもたちも尻尾を巻いて逃げ出した。勇敢だったのは、オピクワンだけだ。村の長おんをしているだけのことはある。彼は大腿で歩き出し、男がやって来るのをじっと真剣に見つめた。

「たしかにナム・ボックだ」と、彼がとうとう口を開いた。彼の言葉が確信に満ちたものだったものだから、女たちは不安に駆られ怯え、さらに引っ込もうとした。

見たこともない奴の口が曖昧に動いた。彼の褐色の喉元は、発せられない言葉で引き曇っている。

「あら、あら、ナム・ボックじゃないの」とバスクワワンが声をからす。顔を覗き込んでいる。「だから、いつも言っていたじゃないの、ナム・ボックは帰ってくるって」

「そのとおり。俺は、ナム・ボックだ。帰ってきた」と、バイダルカの中に片方の足を入れたまま、彼は言った。足を波に浮かせ、もう一本の足を岸につけた恰好だ。またしても、彼の喉元が引き攣る。忘れてしまった言葉を思いだそうと必死だったのだ。言葉が口にされると、それは喉頭音をともなう唇の発する奇妙な音となった。「ごきんげよう、皆さま」と彼は言っていた。「俺が沖風とともに出ていく前の、古き時代の兄弟たち」

ナム・ボックは、両足を砂浜に踏み出していった。オピークワンが追い払うような仕草をして言う。

「お前は仏様なんじゃ、ナム・ボック」

ナム・ボックは笑った。「俺はデブなんだ」

「仏様はデブではない」と、オピークワン。「羽振りのいい生活をしていたみたいだな。でも不思議だ。沖風と結ばれた者が、何年もして戻ってくることもなくて、ないはずなんじゃが」

「でも、俺は戻ってきた」というのが、ナム・ボックのシンプルな答え。

「それでは、お前は影なんだな。生きていたナム・ボックの傍き影だ。影が帰ってきたということだ」

「俺は腹がへったよ。影は飯なんて喰わんだらう」

それでもオピークワンはまだ疑っていた。痛いほどに当惑して、額のあたりを手でこすっていた。ナム・ボックも同じくらい当惑していた。一列に並んだ村人たちを眺めても、漁民たちの目に歓迎している様子はない。男たちも女たちも何事か囁いている。子どもたちも、こそこそと大人たちの後ろに集まっている。逆毛を立てた犬たちが取り入るように彼に近づき、疑わしそくに鼻をクンクン鳴らした。

「お前さんを産んだのは、わたしだよ。小さいころ乳をやったのも、わたしだ」と、バスクワワンが近づいてきて、べそをかきかき言った。「お前は影なのかもしれないし、そうでないのかもしれないが、それでも飯は用意してやろう」ナム・ボックは彼女に近寄ろうとしたが、犬たちが恐怖と威嚇のうなり声をあげた。それで彼は思わず後ずさりしてしまった。得体の知れない言葉で、彼は何か罵った。それは「畜生」という音に似ていた。そして、こうもつけ加えた。「俺は影ではない。人間だ」

「謎な事柄について誰が何を知りえよう？」とオピークワンが、半分は自分にむかって、半分は村人にむけて訊ねる。「我々は存在し、次の瞬間には存在しておらん。この男が影になったのかもしれないのなら、影だって人になりえよう。ナム・ボックは影だったのだが、今は影ではない。これだけは分かっている。が、これがナム・ボックなのか、ナム・ボックの影なのか、それは分からん」

ナム・ボックは咳払いをし、返答をする。「遠き遠き昔、オピークワンよ、あなたの父の父は出てゆき、何年もしてから村に帰ってきた。そのときも、焚き火の横の場所が彼に戻された。言い伝えによれば……」と、ここでナム・ボックは、重々しく言葉を切った。村人は固唾を飲んで見守る。「言い伝えによれば」とくり返して、彼はわざと重さがより深く浸透することを狙った。「あなたの祖父の女のシップシップは、彼の帰郷後、二人の息子を産んだそうではないか」

「しかし、祖父は岸から離れた海の風とは何の関わりも持たなかった」と、オピークワンが反論する。「祖父が向かったのは大地の奥深くだ。男が大地の奥へと向かうのは自然なことであろう」

「海だって、同じさ。しかし、こちらかあちらか、というのが問題ではない。言い伝えによれば……、あなたの祖父はかの地で見てきたことについて、不思議な話をしたというではないか」

「そうだ。確かに不思議な話をした」

「俺にも、話すべき不思議な話がある」と、じつくりと効果を狙ってナム・ボックは言う。そして、少々躊躇ったあと、「そのうえお土産もある」とつけ加えた。

彼は、バイダルカからショールを取り出した。すてきな生地と柄のものだ。それを母の肩に掛けてやる。村の女たちが皆、賞賛のため息をもらした。老婆バスクワーンは、その華やかな着物をくしゃくしゃにして畳むとボンと叩き、子どものように喜んで鼻歌を歌った。

「そして、話すべき話があると」。こうクーガが呟いた。「お土産もね」と、ある村の女もつけ加える。

オピークワンには、漁民たちが興味津々なのが分かっていた。さらに自分もまた、この聞いたこともない話を聞きたくてしょうがなくなっているのが分かっていた。「魚は大漁だった」と、思慮分別をよそおってオピークワンが言う。

「油もたくさんある。それでは、ナム・ボックよ、宴会をすることしよう」

村の男二人がバイダルカを肩にかつき、焚き火のほうへと運んだ。ナム・ボックは、オピークワンの横を歩き、ショールに触って愛でていた女たち以外の村人が、これに続いた。

宴会の席で話をする者はほとんどなかった。バスクワーンの息子に好奇の眼差しをこっそり向ける者は多数いたのだが。これにナム・ボックは困ってしまった。シャイな性格だったから、というのではない。アザラシの油の臭いがきつすぎて、食欲がすっかりなくなってしまうていたからだ。食事についての感想を知られまいと、彼は必死になっていた。

「喰え、腹がへっているだろう」と、オピークワンが命ずる。ナム・ボックは両目を閉じ、臭い魚の詰まった壺に両手をつ突っ込んだ。

「ほらほら、遠慮はいらないのよ。アザラシは今年、大漁だったし、強き男というのは、いつでもお腹を空かせているものだから」と、とりわけ悪臭を放つサケを油につけると、バスクワワンが油がポトポト垂れるその切り身を、こやかに渡してよこした。ナム・ボックは絶望的な気分になった。昔ほど自分の消化器系が丈夫ではないと、吐き気という兆候から察していたのだ。そこで彼は慌ててパイプに煙草を詰めると、マッチをすった。村人たちは食事をつけ、彼を見ている。この高価な草をよく知っていると自慢できる村人はほとんどなかったが、北に住むエスキモーとの交易で、ときには少量、ときには大量のタバコが手に入ることもあった。ナム・ボックの隣に座っていたクーガが、自分も一服するのにやぶさかではないと言う。唇を油で濡らし、二口サケを食する合間に、クーガがその茶色の道具から煙を吸った。パイプが返されると、ナム・ボックは、震える手で胸をおさえ、返す必要はないと伝えた。「それはお前のものにしてくれ。クーガは、最初から俺の名誉を守ろうとしてくれたのだから」と言ったのである。ここで、指を舐めまわしていた村人たちは、ナム・ボックの気前の良さを褒め称えた。

オピークワンが立ち上がる。「ナム・ボックよ、宴はそろそろお終いじゃ。お前が見てきた奇妙な物事の話を、聞くじゃないか」

漁民たちは拍手し、仕事道具を手元にたぐり寄せると、聞き耳を立てた。男たちは槍を作り象牙に彫刻を彫るのに、女たちはアザラシの毛皮から脂肪膜をはぎ取り、使いやすく皮鞣なめしたり、あるいは臄ぬいの繊維を使ってマカラク（家柱）を縫うのに、それぞれ忙しくしていたのだ。ナム・ボックは、一堂を眺め渡した。が、記憶によれば期待してよいはずだった魅力は、そこにはなかった。放浪の日々において、この場面を心待ちにしていたのに。けれど、実際その場に遭遇してみると、ただ失望するばかりだった。それが未開の貧しい生活以外の何ものでもなく、彼が慣れ親しんだ生活とは比べようもないと思えてしまった。でも、村人の目を覚まさせてあげることができる。そう考えると、彼の瞳には輝きが戻った。

「兄弟たちよ」と、自分の成し遂げた偉業を語るとき、よく人が見せる独善的で自己満足した調子で、彼は話しはじめた。「幾夏も前の夏、今の季節がやがてもたらすであろう天候のなか、俺は村を出て行った。皆も覚えているであろう。カモメが低く飛び、陸から海へと強風が吹きあれ、俺はバイダルカを支えきれなくなった。バイダルカの覆いを体に巻きつけ、俺は濡れないようにした。そして、一晩中、嵐と戦わなくてはならなかった。朝になると、陸は見えない。海、それだけだ。海風が俺をつかみ、どんどん流されていった。夜が三回、白い夜明けを迎えても、まだ陸は見えず、海風はまだ俺は離さなかった。

「そして四日目、俺は狂人みたいだった。食い物がなから權を握ることもできず、喉の渇きで頭の中がグルグル回る始末。でも海の怒りはおさまっていた。優しい南風が吹いていた。辺りを見回してみると、本当に俺は狂ってしまったんだと思わざるをえない光景が目に見え込んできた」

ナム・ボックは、齒のあいだに挟まったサケの肉を吐き出すため、話を中断した。手と頭が暇になった男も女も、身乗り出して話の続きを待った。

「それはカヌーだった。でっかいカヌーだ。生まれてこのかた見てきたカヌーを全部くつつけたとしても、敵わないぐらいで、でかいカヌーだった」

不信任を表明する叫び声があがった。それなりに齡を重ねたクーガは、首を横に振った。

「バイダルカ一艘を砂粒の大きさとしよう」と、ナム・ボックは挑戦するかのようにつける。「そして、この浜の砂粒の数と同じだけのバイダルカがあるでしょう。それらを全部集めても、四日目の朝に俺が見たカヌーの大きさにはならない。とんでもなく大きなカヌーで、それはスクーナー船と呼ばれていた。その不思議なもの、偉大なるスクーナー船が俺を追いかけてきてたんだ。それから、俺はそれに乗り込み男たちと対面することに……」

「待て、待て、ナム・ボックよ」とオピークワンが口をはさんだ。「その男たちというのは、どんな奴らだったのじゃ。でかい男なのか」

「いや、男たちは俺たちぐらいの大きさま」

「大きなカヌーは速いのか？」

「速い」

「船はでかく、人は小さい」。オピークワンが確信を込めて条件をまとめた。「で、男たちは長い樫で漕ぐのか？」

ナム・ボックが、にやついて答えた。「樫はないんだ」

村人たちは呆気にとられ、口が開いたままになった。そして、しばらく沈黙が続いた。オピークワンは、クーガからパイプを借り、思い悩むように二回ほど煙を吸い込んだ。若い娘の一人は緊張のあまり引きつり笑いをし、目を怒らせた。

「樫がないだと？」と、パイプを返しながらオピークワンがゆっくり聞き返した。

「南風が後ろから吹いていた」と、ナム・ボックが説明する。

「それでも、風によって潮の流れはゆっくりになる」

「このスクーター船には、羽根がついているのさ。こんな具体に」。彼は砂の上に、マストや帆の構造図を描いてみせた。村人たちがそれを取り囲み、じっと見つめる。強めの風が吹いていた。それで、もっと具体的に分かってもらえよう、ナム・ボックは母親が肩に掛けていたショールの両隅を持ち、帆のように膨らむまで抜いていた。バスクワワンは嫌がって叱りつけていたけれど、やがて浜辺の上を二十フィートも飛ばされていった。流木が集まったところのようにやく止まり、彼女は息を切らした。村人たちは、分かったというように頷いた。しかし、クーガは、白髪を頭を翻

した。

「ハハハハハ」と笑う。「この大きなカヌーというのは、お笑いぐさじゃ。馬鹿馬鹿しい。風の遊び道具じゃないか。風の吹くまま、どこへでも行ってしまおうカヌーだ。この船に乗った者は、行き先の浜を告げられぬ。だっていつも風と一緒にだ。風はどこへでも吹く。だがどちらへ吹くのかは、誰にも分からん」

「まったくその通りじゃ」と、オピークワンも重々しくつけ加える。「風の吹く先へ行くのは容易じゃが、風と反対の方向へ行くのは難しかろう。そもそも権がないだから、どこかへ『行こう』とすらできない」

「どこかへ向かうつもりなんて、必要ないんだよ」と、ナム・ボックが怒って言う。「スクーター船はね、風上に向かって進むんだ」

「じゃ、そのスク、スク、スクーター船を進めるのは何だと、お前は言ったのか？」と、聞き慣れない言葉にわざとつまりながら、クーガが問う。

「風だ」が、じれったそうな回答。

「すると、風がスク、スク、スクーター船を、風上に進めることになるのだな」と、老クーガが、意地悪そうな横目でオピークワンに目くばせをする。周りの男たちの嘲笑は続いていた。「南から風が吹く。そして、スクーター船が南に運ばれる。風が風と反対の方向に吹いているみたいだ。風が両方向に同時に吹いているのか。とても単純なことなんだな。我々には分かるよ、ナム・ボック。間違いなく我々は理解している」

「お前たちは馬鹿だ！」

「真実は、お前の口から語られたよ」と、クーガが優しくそうに答える。「わしは理解するのが遅かった。いやはや、事は単純だった」

しかしナム・ボックは紅潮し浅黒くなっていた。村人が聞いたこともない言葉を、矢継ぎ早に繰り出した。村人は、ふたたび骨の彫刻、あるいは皮鞣しの作業に戻った。ナム・ボックも信じてもらえない話はしないよう、口を閉ざすことにした。

「そのスク、スク、スクーナー船は、大きな木でできているのかな」と、落ち着き払ってクーガが訊く。

「多くの木からできている」と、ナム・ボックが言葉少なにピシヤリと答える。「とても大きな木から」

彼はふたたびむっつりと黙り込む。オピークワンがクーガの脇をつつき、クーガが驚いたようにゆっくりと首を横に振った。そして、こう漏らす。「とても不思議なものじゃのう」

ナム・ボックは、まんまと乗せられてしまった。「あんなのは大したものじゃない」と、偉そうに言ってしまう。「蒸気船を見なくては、話にならないね。バイダルカは砂粒のようなもの。何千艘のバイダルカを集めて、やっとスクーナー船一隻になる。何千隻のスクーナー船にあたるのが、蒸気船だ。蒸気船は鉄でできている。ぜんぶ鉄製なんだ」

「それはないだろう、ナム・ボック」と村長のオピークワンが言った。「それはあり得ん。鉄は海底へ沈んでしまう。隣村の村長から交換で鉄のナイフをもらったことがある。それが昨日、指から滑り落ちて、海の底へとどんどん沈んでいったよ。すべての事柄に掟というものがある。掟から外れるものは、ないのじゃ。これを我々は知っている。そのうえじゃ、同じものは同じ掟に従う。これも我々の知るところじゃ。だから、鉄には一つの掟だ。ということなのだから、言ったことを取り消しなさい、ナム・ボック。そうすれば我々は、お前への敬意をなくしたりはしない」

「しかし本当なんだよ」と、ナム・ボックも執拗だ。「蒸気船は鉄でできているが、海の上でも沈まないんだ」

「それはあり得んだろう」

「この目で見たんだ」

「それでは自然の成り立ちに反しておろう」

「ナム・ボック、教えてくれよ」と、そこで話が終いになってしまわないようクーガが口をはさむ。「船の進路を知らせる陸地がないところで、その男たちはどうやって船の行く方向を知るのだろう？ 教えてくれよ」

「太陽が知らせてくれる」

「でも、どうやって？」

「正午に、スクーナー船の船長が太陽を覗く道具を取り出し、太陽を地平線の彼方へ沈ませるのさ」

「それは邪悪な魔術じゃ」と、神への冒瀆に仰天したオピークワンが大声をあげた。村の男たちは恐怖のあまり両手を挙げ祈りを捧げる恰好になり、女たちはうめき声をあげた。「邪悪な魔術だ。偉大なる太陽、夜の闇を解き、アザラシ、サケ、そして暖かき季節を我々にもたらす太陽の進む方向をいじるなど、善きことではない」

「それが邪悪な魔術だとしたら、どうだって言うんだ」と、ナム・ボックが好戦的に言い返す。「俺自身、その道具を通して太陽を覗いた。そして地平線に太陽を沈めてみたよ」

彼のそばにいた村人たちが、いそいそと離れていった。女たちは、ナム・ボックの視線に触れないよう、胸に抱いた赤ん坊の顔を隠した。

「しかしだ、ナム・ボックよ、四日目の朝に」と、クーガが話を続けさせる。「四日目の朝、そのスク、スク、スクーナー船が、お前を追ってきたのだろう？」

「もうほとんど力が残っていなかったから、逃げることはできなかった。それでスクーナー船に乗せられ、水をもらい、十分に食べさせてもらった。村の兄弟たちよ、皆は二度ほど白人に会ったことがある。俺が会った船員たちはみな白人で、俺の手と足の指を全部あわせたくらいの人数だった。誰もが親切なのが分かったから考え方を変えて、帰った

ら、自分の見たことについて村の皆に伝えてやるうと心に誓ったのさ。白人たちは、彼らがした仕事について教えてくれ、良い食事もある場所も提供してくれた。

そして、来る日も来る日も、俺らは海の上を進み、毎日、船長は地平線の彼方に太陽を沈め、自分たちの現在位置を確認した。波が静かだったとき、毛皮用にアザラシ狩りをしたんだけど、驚いたよ。奴らは肉も脂も捨ててしまい、皮だけを取っておくのさ」

オビークワンの口元は、激しく引き曇っていた。そんな無駄遣いは許せない、と糾弾したくて仕方なかったのだ。しかし、クーガが蹴って彼を黙らせた。

「俺らがうんざりし、太陽が姿を消し、冷気の爪が感じられるころになって、船長はスクーナー船の船首を南に向けてさせた。南へ、また東へと、何日もかかって船は航行した。その間、陸を見ることは一度もなかった。そして、出発した村の近くへと戻ってきた」

「どうやって村に近づいている、と奴らには分かったのじゃ？」と、オビークワンが抑えきれなくなって訊いた。「陸は見えなかったのだろうか？」

ナム・ボックが怒りのこもった視線で睨みつけた。「船長が道具を使って、太陽を地平線の下へ沈めたと云っただろうが！」

クーガが割って入り、ナム・ボックに話を続けさせた。

「言ったとおり、船がその村に近づいていたとき、大嵐になった。夜、俺らは誰の力も頼れず、どこにいるのかわからなくなった」

「船長には分かっていたのだと、今しがた、お前は言っていなかったか？」

「オピークワン、よく考えろよ。本当に馬鹿だな、ちっとも理解してくれない。言ったとおり、夜、俺らには方向を知るすべがないんだよ。だから、その夜、嵐の怒号のなか、浜に打ち寄せる波の音が聞こえてきた。次の瞬間、とんでもない衝撃を感じた。海に投げ出されていたんだ。俺は泳いでいたよ。岩だらけの海岸だったんだ。何マイルも海岸が続くなか、わずかに浜辺になっているところがあった。従うべきは、手を砂の中に突っ込み、引き波にさらわれないうすること、この鉄則だけだった。ほかの船員は岩にぶつかってしまったのだろう。だって、岸に上がってきたのは、船長ただ一人だったんだ。船長だって分かったのだって、指に指輪があったからだ。それだけだったんだけどね。」

朝になって、スクーター船は影も形もなくなっていた。それで、俺は陸地の奥にむけて進むことにしたのさ。もしかしらら食料を手にすることができるかもしれないし、人に会うことだってあるかもしれないと思って。家が一軒、見えた。中へ入れてもらえて、食事にあずかった。彼らの言葉を知っていたから。そして、白人は、いつもどおり親切だった。その家は、俺たちが建てた家、俺たちの父さんが建てた家のどれよりも大きかった」

「巨大な家だったわけだな」とクীগ。不信任を驚きで隠していた。

「たくさんの木がそんな家を建てるのに使われたのじゃろう」と、ヒントを受け取りオピークワンも相づちを打つ。

「あんなのは何でもないよ」と、相手を馬鹿にするかのようになり、ナム・ボックは肩をすばませた。「俺たちの家があの家と違うように、あの家は、俺がそのあと見ることになる家ともぜんぜん違った。もっとずっとでかい家があるんだ」

「そして、その住人は大男ではないと言おうのじゃな」

「大男なんかじゃない。あんなたちと俺みたいな普通の人だよ」というのが、ナム・ボックの答えだった。「俺は気持ち良く歩けるように、木を切ってステッキにしてみたんだ。そして色んなことを皆に伝えなくてはいけないと思っていたから、兄弟たちよ、その家に住んでいる人に会うたび、印をつけることにした。そこには何日も泊めてもらった。そし

て仕事もした。お札として、彼らは俺にお金をくれた。お金については、あんたたちは何も知らないだろうけど、でも便利なものなんだよ。

ある日、俺はそこを離れることにして、もっと奥地へ行ってみることにした。歩いていると、色んな人に出会った。ステッキに付ける印は小さくした。全員のぶんの印が付けられるようにね。それから不思議なものに出くわした。目の前の地面に鉄の延べ棒が置いてある。俺の腕ぐらいの太さで、大股で一步歩いたところに、もう一本、鉄の延べ棒がある」

「それじゃ、金持ちになれたんだな」とオピークワンが断言する。「なぜなら、鉄ほど価値のあるものはこの世にないからの。ナイフが何本も作れたらう」

「いや。あれは俺のものじゃなかったから」

「拾い物だろう。拾い物を自分のものにするのは、法に適っておる」

「そうじゃない。白人たちがそこに置いていたんだ。また、その延べ棒はあまりに長いから、誰も持っていくことなどできない。見渡してみても、端っこが見つからないくらい長いんだ」

「ナム・ボックよ、それは本当に鉄じゃったのか？」と、オピークワンが訝しがる。

「そうだ。自分の目で見た俺自身、信じられなかったけどね。しかし自分の目が見たものを、信じないわけにもいかないだろう。そして眺めていたら、音が聞こえてきて……」。ここで急にナム・ボックは、むらさき村長のオピークワンのほうを向き、こう言った。「オピークワンよ、怒ったトドが吠え声をあげるのを聞いたことがあるだろう。海にある波と同じだけの数のトドがいる、こう想像してみてください。そしてこのトド全部が一頭のトドになる。そして、その一頭が吠え声をあげる。その声が俺の耳に届いてきたんだ」

村の漁民たちが驚きの声をあげた。オピークワンの下あごは下がり、開いた口が閉まることはなかった。

「遠くに、まるで千頭の鯨のような怪物が見えた。そいつは一つ目で煙を吐いていた。そいつの鼻息で耳が潰れそうだった。恐くなって膝がガクガクになったけど、鉄の延べ棒のあいだを走ったよ。でも、そいつ、この怪物は、風の速さで迫ってきた。あいつの熱い吐息が俺の顔にかかったとき、鉄の延べ棒の外へ飛び出した」

オピークワンは、下あごの制御を取り戻した。「そ、それで、どうなった？ ナム・ボック？」

「その怪物、延べ棒に沿って走り抜けていきやがった。俺に怪我はなかった。足の震えがおさまり立ち上がってみると、もうそいつの姿はない。で、これはその国では何ら珍しいものでもないんだ。女も子どもも、そいつを怖がったりはしない。男たちはこの怪物に仕事をさせる」

「我々が犬に仕事をさせるようにか？」と、目に懷疑の輝きを湛えたクーガが訊く。

「そのとおり。俺たちが犬に仕事をさせるように」

「白人たちは、そいつにどうやって子どもを産ませるんじゃ？」と、オピークワンが質問する。

「子どもを産ませることはしない。男たちは、鉄を材料にして、うまいことそいつを作ってしまうんだ。石を喰わせ、飲み水をあたえる。石は火になり、水は蒸気になる。水蒸気が怪物の鼻から出る息なんだ。そして……」

「待て、待て、ナム・ボック」と、オピークワンが遮る。「ほかの不思議話にしてくれないか。訳が分からんもの話には、もう飽きてきた」

「訳が分からない？」と、ナム・ボックが絶望して問いただした。

「そうだ。訳が分からん」と、村の男も女も嘆き返した。「理解のしようもありません」と。

ナム・ボックは、収穫用コンバインのこと、生きている人間の姿が写し出す機械のこと、人の声が聞こえてくる機械

のことを考えていた。しかし、誰もこれらについて理解してくれないとも分かっていた。

「鉄の怪物に俺が乗って陸地を動き回ったという話なら、してもいいかな」と、吐き捨てるようにナム・ボックが言う。

オピークワンは両手を広げ、手のひらを上ににして、信じられんという仕草をしたが、こう言った。「続けよ、何にいつでも語るがよい。我々は聞いておるぞ」

「俺は鉄の怪物に乗り、それに対してお金を払った」

「怪物の喰い物は石だと言わなかったか」

「馬鹿だなあ。お金については、お前らは何も知らない。そう言っただろう。言っただとおり、俺は怪物に乗り陸地を動いて回った。多くの村を過ぎたところで、半島の先の大きな村に出くわした。家々は空の星のあいだに屋根を押しつけ、雲が屋根のわきを流れていた。どこに行っても雲だらけさ。この村の立てる喧嘩は、嵐の海の怒号のようだった。人多すぎて、俺はステッキを捨ててしまったよ。だから、そこに付けた印の数は、もう思い出せない」

「きちんと報告できるようにと、小さな印にしたのではなかったか」とクীগが責める。

ナム・ボックは怒り、クীগに向かった。「小さな印にしてなかったか、だって？ 骨の彫刻師クীগよ、よく聞け。小さい印にしたとしても、一本、いや二十本のステッキでだって、足りなかったんだ。いや、この村と隣村のあいだの浜に転がっている流木を全部つかっても、無理だったんだ。もし皆が、女も子どもも含めて皆が二十倍の数になっても、一人ひとりが二十本の腕を持っていたとしても、そしてその手全部にステッキとナイフを持ったとしても、俺が見た人の数のぶんだけ印をつけるなんて、できなかったんだ。それぐらい多くの人がいて、それぐらいの多くの人が行ったり来たりしてたんだよ」

「そんなに多くの人間がこの世界にいるはずがなかるう」と、オピークワンが反論した。彼の頭ではそんな大きな数をイメージできなかったから、茫然としてしまっていた。

「この世界について、どれだけのことを知ってるつもりなんだよ？ その世界とやらは、どれくらい広いんだ？」と、ナム・ボックが訊いた。

「しかし、一つの場所にそんなに多くの人がいるわけがない」

「いるわけがあるとかないとか、そんなこと、あんたに分かるのかよ」

「一つの場所にそんなに多くの人はいられない。これは理屈に合う話だと思うがな。彼らのカヌーで海がいっぱいになってしまっただろうし、どこにも隙間がなくなってしまう。魚もいなくなり海が空っぽになり、食べ物もなくなってしまう」

「そう思ってしまうのだろうな」と、ナム・ボックが最後の答えを出す。「それでも、俺が言ったことが事実なんだ。自分の目で見てきたんだ。だから、ステッキは捨てた」。ナム・ボックは大きなあくびをすると、立ち上がった。「今日は、パドルでたくさん漕いだ。長い一日だった。疲れたよ。今日のところは寝るとするが、明日になったら、また見てきたものの話をしやる」

老婆バスクワワンは、怖いと思いつつも、先に立ってよろよろと進んでいた。実際には誇りいっぱいだったのだけれど。不思議な息子に畏怖の念を抱き、彼を自分の小屋へと導いた。それから脂まみれで嫌な臭いのする毛皮の中に、彼を押し込んだ。ところが、村の男たちは、まだ焚き火を囲んでいた。寄り合いがもたれており、囁きがあり、ひそひそ声の話し合いが続いた。

一時間が経ち、二時間が経った。ナム・ボックは寝ていた。それでも話し合いは続いた。夕日は北西の方角に沈みか

け、夜の十一時には、ほぼ真北の位置にきていた。村長と骨の彫刻師が皆から離れ、ナム・ボックを起こしたのは、この時刻のことである。ナム・ボックはまばたきしながら二人の顔を覗き込むと、寝返りをうって、また寝てしまった。オピークワンが腕を掴み、優しく、しかし力強く、ナム・ボックを起こした。

「さあ、ナム・ボック、起きるんじゃ」と、オピークワンは命令する。「時が来たのだ」

「また宴会かい？」と、ナム・ボックは大声になっていた。「いや、俺は腹はへってないんだ。皆でやってくれ、俺は眠い」

「去るべき時が来たのだ」と、クーガが怒鳴った。

ところが、オピークワンの声は前よりもっと優しくなる。「お前は、我々が子どもだったころ、わしのバイダルカの友じゃった。初めてアザラシを追いかけたのも、サケを網から取ったのも、お前と一緒にじゃった。わしの命を救ってくれたのも、そなただった。ナム・ボック。わしが波に飲み込まれ、黒い岩のところまで沈んでしまったときのことだ。一緒に飢えをしのぎ、冷気にも耐えた。一緒に一枚の毛皮にくるまり、くっついていたっけ。これらの思い出、そしてわしのそなたへの気持ちゆえ、帰ってきたお前がそんなとんでもない嘘つきになっているのを見て、本当に悲しく思う。我々には理解不能なことばかりだし、お前の話を聞いていると頭がぐらぐらする。うまくない。そして、寄り合いではなくさん話し合ったのじゃ。というわけで、我々はそなたを送り返すことにする。我々の頭が明晰さと強靭さを保ち、説明のつかぬ事柄で悩まされたりしないようにするためじゃ」

「お前が話したことは、影の話なのだ」と、クーガが話を継いだ。「影の世界から、お前はそれらを連れてきた。だから、影の世界にそれらを戻さねばならない。お前のバイダルカの準備はできている。部族の者たちも待っている。皆、お前が出てゆくまで眠ることができぬのだ」

ナム・ボックは愕然とした。それでも、村長の声に呼び覚まされた。

オピークワンはこう言っていた。「もしそなたが本当にナム・ボックならば、お前は恐ろしい、とんでもない嘘つきだ。もしそなたがナム・ボックの影であるのなら、お前の話は影についての話ということになる。影について、生きて人間が知識をもつのは良いことではない。そなたが話した大きな村だが、それは影の村なのだ。我々は考える。ここでは、死者たちの魂が蠢いている。死者の数は多く、生きる者の数は少ない。死者はこちらに帰ってきてはいかない。死者がこちらに帰ってきたことも、今までのところはない。不思議な話をするそなたを除いて、ということじゃ。死者がこちらに戻るの、いけないことなのだ。もしそんなことを我々が許せば、厄介きわまりないことになる」

ナム・ボックは、漁民たちのことを良く知っていた。寄り合いの結論が絶対的であることも分かっていた。だから、案内されるまま海岸へと向かったのである。そこで彼はバイダルカに乗せられ、手にはパドルを渡された。仲間から逸れた一羽の水鳥が、沖のほうで鳴いている。さざ波が、力無く、虚しく砂浜に寄せていた。海も陸もうっすらとした夕闇に覆われ、北の方向には、ぼんやりと何か悩み事を抱えているかのような、くすんだ太陽が見えた。霧が血潮の赤に染まっていた。カモメが数羽、低空を飛んでいる。沖へ吹く風は強く冷たい。黒の塊となった雲が、悪天候になることを告げていた。

「海からそなたはやって来た」と、オピークワンが神託を告げるかのように歌う。「だから、海へとそなたは帰る。こうして平衡は保たれ、物事が秩序を取り戻す」

老婆バスクワーワンは波の泡のところまでよろよろと進み、大声で言う。「ナム・ボックに、神の祝福あれ。お前はわたしのことを覚えていてくれた」

しかし、クーガは、ナム・ボックの乗ったバイダルカを沖に押し出すと、女の肩からショールを奪い、舟の中へと投

げ込んだ。

「長き夜は寒いじゃよ」と、バスクワーワンが嘆く。「冷気が、年寄りを骨の髄まで凍らせてしまう」

「そのシヨールは影なのだ」と、骨の彫刻師は答える。「影では暖まることはできない」

ナム・ボックは、声が届くよう立ち上がった。「俺を産んでくれた母、バスクワーワンよ、息子ナム・ボックの言葉聞いてくれ。このバイダルカには、二人ぶんの席がある。息子は母と一緒に来てほしい。なぜなら旅の終わるところには、魚も油も、たくさんあるからだ。そこでは、冷気に襲われることもなく、生活は楽だ。鉄でできた道具たちが、人に代わって仕事をしてくれる。バスクワーワンよ、一緒に来てくれないか？」

母は一瞬、考え込んだ。その間にも、舟はどんどん離れていった。母の声は震える最高音になった。「わたしは年寄りなのよ、ナム・ボック。やがて影たちの元へゆくことになる。それでも最期まで、そこに行こうとは思わぬ。わたしは年寄りで、恐いのよ」

薄暗く光る水面みなもに、一条の光が差した。舟と男が赤と黄金の輝きに包まれる。漁民たちを沈黙が覆い、聞こえるのは沖へ吹く風の悲しい音と、低く空を舞うカモメの泣き声だけとなった。

《訳注》

- (1) バイダルカ。アラスカ・イヌイットが用いるアザラシ皮のカヌー。
- (2) タモシャンター。スコットランドの農民が用いるウール製の大黒ずきん型の帽子。
- (3) マクラク。エスキモーが履くアザラシヤトナカイの毛皮で作った長靴。

【訳者付記】

短編集『氷点下の子どもたち』に三作目として収録されている作品。白人文明にふれた主人公がエスキモーの村に戻るようになるが、白人からの影響ゆえに「影」として、「死者」として村から放逐される。短編集の配列では「生命の掟」の次にくることになるが、対照的に軽いコメディ・タッチの佳作となっている。

〈短編集前半の書籍内の配列〉

“In the Forests of the North” 「極北の森」

“The Law of Life” 「生命の掟」

“Nam-Bok, the Unveracious” 「嘘つきナム・ボック」

“The Master of Mystery” 「最強の謎解きマスター」

処女長編『雪原の娘』執筆の際につくったマクルアース社への借金を返済するために書かれた。が、掲載を断られ、『ハーパーズ』誌、『コリアーズ』誌などにも原稿を送ったが受け入れてもらえず、当時何作か発表させてもらっていた『エインスリズ』誌に掲載された(“The Great Interrogation” [Dec. 1900] / “Siwash” [Mar. 1901] / “Local Color” (原題 “The Hobo”) [Dec. 1903] が、『エインスリズ』誌に掲載)。

以下でやや詳細に執筆状況を整理するが、前回訳出した「キーシュ、キーシュの息子」のあとで執筆された。「キーシュ」同様、白人文明にふれたネイティブが共同体のなかでどのように扱われたか——村八分にされる——を描いてい

る。この作品では、「白人による搾取」といった意味での白人糾弾の要素はさらに弱い。逆にここで「白人は親切だった」と主人公は何度も繰り返している。それでも、あるいはそれもあって、変わり者、あるいは「死者」として主人公ナム・ボックは村から排除されることになる。異人種にありそうな振る舞いをコメディイとして描いており、ロンドンの（主に）白人の読者たちとすれば、異国情緒をたえた軽い読み物として楽しめたのだろう。

J・リースマンは、西洋文学に伝統的なナラティブ——『オデッセイア』に見られるような英雄の離郷と帰郷——のパロディーの要素があると指摘し、その伝統を疑問視する作品であるとさえ主張している（*Companion*, p.199）。つまり、白人文明へのロンドンの否定をこの短編に読み込んでいる。D・ウォーカーは、最後の別れの場面に見られるロンドンの雰囲気作りのうまさが高く評価する。音と色彩の扱いが注目されるべき点だと我々も考える。海をゆく海鳥をさりげなく登場させるあたりは、デビュー作「日本近海の台風の話」の描写を彷彿とさせる。ウォーカーはまた、文明の所産、とりわけサンフランシスコの異化された描写に注目している。重いメッセージがあるわけではないと思うが、確かに一読後、忘れるのが困難な情景である。「空の星のあいだに屋根を押しつける家々」など。

話しても村人たちには信じてもらえなかった文明とは、スクーナー船、蒸気船、お金、サンフランシスコの喧噪、鉄道、映画、蓄音機といった、多くは近代テクノロジーの産物のことだ。ナム・ボックの、また村人の驚きは、おそらく世紀転換期の都市文明を生きていた本国アメリカ人の、つまりロンドンと同時代を生きていた一般読者の驚きでもあったのだろう。そのような意味で、十分に読者というマーケットが意識された作品である。

短編集の読者は、まず「極北の森」で、インディアン村に入った白人、そして暴力的にそこから離脱しようとする男の物語、つまり白人視点の重い作品を読む。ほとんど「ネイティブ・ワールド」が挨拶しているにもかかわらず、次に普遍化された死の不可避性の物語を「生命の掟」で経験する。普遍化されているとはいえ、作家が狙ったように、じゅ

うぶんにインディアンの視点に立つことになる。そしてこの作品で、奇妙なネイティブの感覚（当人たちとしてはじゅうぶんに白人文明は恐怖の対象であったろうが）と風習に、白人化されたネイティブを通してふれる。ここまででは、短編集の読書体験はこのようなものになる。

「リアリティ・エフェクト」と自然化することができなくはないが、我々の視点からすれば、彫刻師クーガの刻む行為とナム・ボックのステッキに刻みを入れて数を数えようとする行為、ここに着目してよいように思われる。物語の流れの中ではとりわけ重要とは思えないディーテルであるが、何やら強調されているようだからだ。英語の語源的口ジックに従えば「書く」とは、「刻むこと」「数えること」である。「to write」は「to score」であり、「to score」は「to cut」「to notch」「to mark」である。

ロンドンには、明らかにこの短編をさらりと書いている。『マクルアーズ』誌に借金があるから、週末までに短編を一本を書き上げる」と作家は書いていた (*Letters*, 1910/7/24, p. 250)。意識の検閲が緩んだとき、「執筆の場面」を想起させるエクリチュールの物質性が、このような何気ない道具立てに現れたと考えられるだろう。

〈第三短編集の脱稿期日順の配列および第二短編集以外の作品執筆〉

一九〇〇年 四月一八日 “The Law of Life” (2,700 words)

—— 一年三月月のインターバル。

『雪原の娘』、『ケンプトンとウェイスの往復書簡』、第二短編集『彼の祖父たちの神』に収められる短編作品などを執筆。

一九〇一年 七月 九日 “Keesh, the Son of Keesh” (3,300 words)

—— 七月一五日—七月二四日 シュッツェンフェスト (全米射撃連盟全国大会) 関連の「イエロージャーナリズム」の記事執筆 (『サンフランシスコ・イグザミネー』掲載)。

一九〇一年 八月 三日 “Nam-Bok, the Unveracious” (5,500 words)

—— “Local Color” と “The Tramp” が執筆されたジェイムズ・ウィリアムズは推測しているが、おそらく間違っている。少なくとも前者は、“An Adventure in the Upper Sea” の後にエントリーされており、一九〇一年十一月頃のものと見られる (Complete Short Stories, Appendix A, Magazine Sales No. 2, p. 2514)。もっとも、ここに奇妙な空白期間があることは事実である。ロンドンの生涯では珍しく、この時期の記録がまったく残っていないのだ。

一九〇一年 八月三日 “Li Wan, the Fair” (6,500 words)

一九〇一年 九月 九日 “The Sunlanders” (8,000 words)

一九〇一年 九月二五日 “The Master of Mystery” (4,100 words)

—— “The One Thousand Dozen” と “The Story of Keesh” を執筆 (J・ウィリアムズの “Date of Composition” が、このエントリーに関しても珍しく間違っている。この頃が正しい日付だと思われる。時期特定ソースは、上掲 “Magazine Sales,” p. 2513 参照)。

一九〇一年十一月 二日 “In the Forests of the North” (6,800 words)

—— “Local Color” (『アメリカ浮浪記』を書くきっかけとなったと思しい放浪記もの短編小説)、“To Build a Fire [I]”, “Moon Face”, “Batard” など執筆。

一九〇二年 三月 四日 “The Death of Ligoun” (3,600 words)

一九〇二年 四月 十六日 “The Sickness of Lone Chief” (3,700 words)

—— “White and Yellow” (『密漁監視隊の物語』[1905] 収録の作品) など執筆。

一九〇二年 五月 二日 “The League of the Old Men” (6,400 words)

確認しておきたいのは、以下の諸点である。

(一) この時期、ロンドンには白人視点、あるいは白人中心のクロンダイクものも書いていた (“The One Thousand Dozen,” “To Build a Fire [?]”).

(二) “The Story of Keesh” はこの短編集に収められていてもおかしくはなかったはずだが、収録されていない。この「キーシュの息子」の続編は、『生命への執着』(Love of Life, 1907) に収められた。作品の出来を作家当人も気に入っていなかったのだろう。

(三) 生涯において、年に平均三冊の本を出版した作家であれば驚くにはあたらないが、この時期に、ロンドンはいわばクロンダイクから飛び出して、多用なジャンルの作品を手がけようとしていた。『野性の呼び声』(一九〇三) がクロンダイクものの頂点であり、その商業的成功もあいまって、作家自身が作家としてのアイデンティティを確立した。自己像と切り離せなくなる「犬／狼」というトータルテーマをもこの作品により手にした。しかしそれ以前において、彼はクロンダイクを卒業しようとしていた。

(四) “White and Yellow” という「牡蠣海賊」「密漁監視官」としての体験を作品化しようとしている。これは『密漁監視隊の物語』として結実するロンドンの「過去」だが、この体験に関しては、『アメリカ浮浪記』とは違

い、徹底的に虚構化されているので、ロンドンの典型的な「自伝語り」と我々は考えていない。海賊体験と作品の虚構度については、ロンドンによる詳細な証言がある。Letters, 1903/3/9, p. 349を見よ。

(五) 『アメリカ浮浪記』として纏められる「ホーボーもの」にも挑戦している。これは、社会主義への開眼と結びつくもので、アメリカ国内で作家が観察した貧困状態に端を発している。しかし、皮肉なことに、作家が商業的に成功するにつれて、そのような社会的意図は消えてゆく。再構築された過去によってなされた自己形成は、異人種や下層階級との接触により、より深化したはずだが、商業化された自己として「成長」と呼べるものにはならない。ロンドンが『マーティン・イーデン』をもってもう一つの達成を成したのだとすれば、そこから彼は生まれ変わることになる。『呼び声』のあとの『ホワイト・ファンク』、『マーティン』のあとの『バーニング・デライト』の二作には、マーケットに飲み込まれた作家の姿が見えるように思う。

しかし、短編作品を考える場合、事情はこのようにシンプルではない。

(おおよ・たけし 理工学部准教授)